

女性の配偶者探索行動の日米比較

Mate Search Behaviors among Women in Japan and the United States

茂木 暁 (東京大学)

Akira MOTEGI (The University of Tokyo)

amotegi@iss.u-tokyo.ac.jp

問題設定

本報告は、配偶者探索行動について、日本と米国のデータの比較分析を通じて実証的に検証する。人口学や社会学では、どのように配偶者やパートナーを見つけるかという探索行動の理解が、結婚行動やカップル形成にとって重要であることが指摘されている

(Rosenfeld and Tomas, 2012; 岩澤・三田, 2005)。カップルの形成は、未婚者のパートナー探索を経て、相手を見つけ出すことによって成立する。ところが、そのような探索過程に関わる情報をもったデータは少なく、研究を進めることが難しい状況にあった。

しかしながら近年、カップルがどのようにして出会ったか(出会い方)について観測したデータの収集がいくつかの先進諸国で進みつつある(Bozon and Rault, 2012; Rosenfeld and Thomas, 2012; 三輪, 2010)。出会い方の違いは、どこで、あるいは、どのようにして、人々が配偶者やパートナーを見つけたかについての情報を伝える。これによって、少なくともカップル形成に至った人々について、配偶者探索行動を分析することが可能となった。日本と米国それぞれのデータを使って得られた知見として、結婚あるいはカップル形成に至りやすい年齢や促進/阻害要因が、出会い方によって異なるという分析結果がある

(Rosenfeld and Thomas, 2012; 岩澤・三田, 2005)。これは、人々が年齢や属性あるいは自分が置かれた条件に応じて、異なる配偶者探索行動をとっている可能性を示唆する。結婚行動やカップル形成を理解する上で、この可能性を検証していくことは重要であろう。

これに関して、上記の研究では、結婚あるいは同棲に至ったサンプルのみを分析対象としている。この方法では、シングルの状態から結婚/同棲への移行は分析対象とならない。上述の年齢や促進/阻害要因を評価するためには、調査時点で未婚もしくはパートナーがいないサンプルも含めて、分析対象サンプルが結婚やカップル形成に関して *at risk* となる設定を採用した分析が必要となる。

データ・方法

本報告では、上記の点を改善するために、結婚を出会い方によって区別し、それぞれを競合リスク事象として捉え、出会い方別の結婚ハザード率を、分析対象サンプルの年齢と個人属性を中心とする促進/阻害要因の関数として特定化した分析を行う。日本については、東京大学社会科学研究所の社研パネル調査プロジェクトが実施した若年・壮年パネル調査、米国については、Stanford 大学の Rosenfeld 教授が実施した調査データ *How Couples Meet and Stay Together* を利用する。出会い方として、仕事・職場、友人紹介、学校、インターネット、その他の5種類を想定する。また先行研究との関連から、女性を分析対象とする。

結果

第一に、出会い方によって結婚が起こりやすい年齢は、日本と米国で異なる。第二に、結婚を促進/阻害する要因も出会い方によって異なるが、その違いのパターンは日本と米国とで異なる。それぞれの詳細については、報告時に説明する。